

論 説

EU の地域アーキテクチャ：
マクロ地域戦略と欧州領域協力団体*

田 中 宏

1. はじめに

EU には現在 (2015年はじめ)、3つのマクロ地域戦略 (バルト海地域戦略 EUSBSR, ドナウ地域戦略 EUSDR, アドリア・イオニア地域戦略 EUSAIR) が確立しており, さらにもうひとつ, EU アルパイン地域戦略 (EUSALR) 案の提出が2015年7月にむけて準備されている。EU のマクロ地域戦略は, これまで研究してきたユーロリージョンのような, ミクロ・ローカルな越境協力の中から分離・成長してきたものである (柑本英雄2014, 102)。

ミクロ・ローカルな越境協力は, 1956年エウレギオの発足, 1964年「オーレスン協議会」発足, 1971年欧州国境地域連合 AEBR の発足, 1975年 EU の地域開発基金 ERDF の発足, 1980年欧州審議会のマドリッド協約の承認, その影響下での1980年代~1990年代越境協力ユーロリージョンの創設・急増, 1988年構造政策改革の開始と Interreg の発足 (1990年第I期), 1993年マーストリヒト条約 (EU による結束の目的定式化, 地域委員会発足), 2003年ニース条約・2009年リスボン条約による領域的結束の追加, そして2006年の共同体法 Regulation による欧州領域協力団体の設立へと進んできた。

マクロ地域戦略の方は次のように発展した。つまり, Interreg 第II期 (1994-1999) の Interreg IIA の一部が「面」として拡大して独立したのが, Interreg IIC のマクロリージョンプログラムである。このプログラムは次には Interreg IIIB (2000-2006) となり, さらに先進を切ったバルト海の場合, 国家間のグランドデザイン VASAB2010 (plus) と結合することで, 2010年に EUSBSR に進化していった (柑本英雄 2014 第5・6章参照)。その後上記の2つのマクロ地域戦略の設立が続く。

このような背景には次のような欧州地域をめぐる歴史的展開があった。つまり, EU 経済統合が, 一方では, 単一市場の構築とユーロ導入を推し進め, 東欧圏の体制転換を誘発し, 他方では, それらの推進が EU の南方と北方, 東方への EU 加盟国拡大を誘導し, さらに地域格差是正とメゾ (あるいはサブ) レベルの地域の内発的発展の促進, 数次にわたる欧州領域協力と Interreg の経験, 欧州とマクロリージョンレベルの空間開発計画の作成, 領域協力プログラムの支援ローカル事務所の設定を生みだし, EU 全体の再生・成長戦略の作成と実施の相互作用のなかで, 現在のマクロ地域戦略が次第に結晶してきている。清水耕一 (2013) によれば, CBC 越境協力の抜本

の解決と旧「リスボン戦略」「欧州2020戦略」が結合した結果である。

マクロ地域(サブリージョン)開発戦略については、わが国においてもメコン川流域を中心に蓄積されてきているが(西口清勝・西澤信善 2014)、欧州地域でのマクロ地域戦略についての調査研究はようやく開始されてきたばかりである(柑本英雄 2011, 2014, 田中宏 2013)。そのなかで、田中宏(2013)はマルチレベルガバナンス MLG そのものの再検討は行わず、EUSDR がもつボトムアップのガバナンスの弱さ、域内の各種非対称性、問題解決の構想力、政策と資金、実効力、統合的アプローチの不足を解明したに留まっている。

ところで他方、EUのマクロ地域戦略の本格的・総合的研究である柑本英雄(2014)は、EUの地域政策の進展とそして越境リージョンの生成とともに創発したマクロリージョンをマルチレベルガバナンス MLG として理解することの限界を指摘して、「垂直的重層のガバメントの管轄領域」と「行為主体としてのガバメント」との峻別を行わず、両者を「埋め込み」状態でモデル化していると批判する(pp. 61-62)。そしてマクロリージョン戦略を、地域政策施行過程におけるスケール間の権力共有形態である「クロススケールガバナンス CSG」の視点から解明している。

スケールとは、特定の社会的プロセスを通して形成される空間単位を意味するが、個々のスケール(身体、世帯、近隣、都市、大都市圏、省・州、国民国家、大陸、グローバル)は固定化されず、クロススケールとはヒエラルキー的でもなく、入れ子状態でもなく、特定のサイズに分割できないとされる(p. 33-35)。

EU 統合の進展のなかで、越境広域空間の開発が EU の地域政策として EU に一端は吸い上げられ(アップロード)、その次にそれを EU から下方(ダウンロード)するとき、積層的な MLG の元のルート(EU—国家—地方政府・州)と同時に、それとは異なる地域政策の「新しい政策容器群」を3つ生み出していった。そのポイントは、EU 領域レベルと州政府領域レベルの間に越境の政策決定のための独自の「挟空間」が出現することを認める点にある(p. 74)。マイクロリージョン CBR、マクロリージョン EUMR そしてメガリージョン(以下では触れない)がそれである(進化論の点からすると、クロススケール、アップロード、ダウンロードは structural feedback, feedback loop, feedback jump, institutionalized shortcut, cross-hierarchy shortcut を表現しているのかもしれない)。

そのなかでクロススケールガバナンスの特徴を最も表現しているのが、マクロリージョンということになる。欧州領域団体 EGTC に相当するマイクロリージョンは、参加行為者の種類や数が限定され、ローカルな地方政府と国境を挟んだ国家間の関係の局面に限られている点で、マクロリージョンほどクロススケール性を鮮明に体現化していない。つまり、両者は本質的に同じであるが、その相違は線と面の違いとして押さえられている。

柑本英雄(2014)の提唱する CSG のもうひとつの特徴は、マクロリージョンのアクター(行為体)を3つの種類に分けていることである。第1種行為体は、EU、国家、地方政府、第2種行為体は商工会議所、漁協、企業、第3種が環境 NGO である。この区分は行為体を規定するものによって区分される。第1種行為体は領域(area)、第2種行為体は機能(function)、第3種行為体は課題(issue)である。だから、マクロリージョンは行為体のハイブリッド種として存在する(pp. 48)。そしてハイブリッド的な行為体システムが発生するなかで、ガバメントというシステムの中核をなしていた国家の国家性が、「国境を越えた逸脱」「スケールの埋め込みからの逸脱」「種を超えた逸脱」によって再び EU に吸い上げられ、さらにそれがダウンロードされ、ヘテラ

ルキーなミクロリージョンやマクロリージョンに再度埋め込まれる、という循環が開始される（pp. 216-223）。

以上の研究は、EUの地域空間に積層的なマルチレベルガバナンスとは異なり、地域政策を実施する地域諸主体と領域、機能、課題がクロスに関連する独特のガバナンスが誕生していることを解明している。唯一の疑問は、3種類の行為（第1種行為体は、EU、国家、地方政府、第2種行為体は商工会議所、漁協、企業、第3種が環境NGO）がありながら、それを領域、機能、課題の3つの点から分類している点である。3つの行為主体は、それぞれの範囲、強弱とそれによる相互関係の変形を観察しなければならないとしても、ともにそれぞれ独自の領域、機能、課題をもっているというのが以下の検討のための理解である。本研究は、柑本英雄（2014）の以上のEU地域統合ガバナンスの理論的ブレークスルーに触発されて、EUのマクロ地域戦略と欧州領域協力団体をそれとは異なった統一的な理論枠組みから接近しようとするものである。

2. 地域統合、リージョナリズムと地域アーキテクチャ

では、EUのマクロ地域戦略と欧州領域協力団体をどのようにして統一的な理論枠組みで観察することができるのか。その統一的な理論的枠組みへの接近を、以下では、進化経済論、とくに地域アーキテクチャ（architecture of region）論に求めたい。しかし残念ながら、地域アーキテクチャ論なるものがすでに存在するわけではない。

アーキテクチャとは日常的には「建物」と理解されているが、ここでは人工システムのシステム設計の基本思想として押さえる（藤本隆宏 2002）。非建築物的現象をアーキテクチャ論から分析するわが国の研究成果はものづくり経営学によって代表される（藤本隆宏 2003, 2007）。地域を人工物として理解できるかどうか議論が分れる点であるが、現在のEUの地域政策の一環として「戦略」論として提起されている面を考慮すると、それも許されるだろう。特に、上記のレビューのなかで指摘された、領域（あるいは機能）と行為主体としてのガバメント（とガバナンス）とをきちんと峻別し、その階層構造に注目する製品・工程アーキテクチャ論はその点で研究方法論上の優位性をもっている。

アーキテクチャから見た地域（リージョン）（architecture of region）

そのものづくり経営学の製品・工程アーキテクチャ論からの比喩を借りれば次のようになる。つまり、リージョンとは何らかの地域設計情報が人工物の素材＝媒体（自然的・歴史的環境）に転写され、モノ・サービスと生命、その環境が再生産される空間ということになる。その空間は現在国境によって分離されている。リージョンの実力は、ある地域の諸機能の再生産の工程の設計思想（アーキテクチャ）と場所（place）と、その中心としての行為体（actor）の組織能力との「相性」（fit）に左右される。この相性は国境によって遮断・変形される。ある地域設計情報の創造の仕方、媒体への転写の仕方がリージョンの形成・再生の基本的課題である。転写は国境によって制限される。ある地域を構成する場所のもつ組織能力は、それぞれのレベル、スケールによって特有の特徴、属性をもつが、場所の組織能力はそのアクター単体の組織能力の調整された東

であり、場所のなかで継承される常軌的な行動パターン（ルーチン）の集合でもある。場所の組織能力は学習によっても構築される。国境を超えるとその組織能力は異なる。したがって、リージョンの再生と創造をめぐる地域政策を考える場合、地域アーキテクチャという概念は重要な分析的示唆を与えてくれるはずである。以上が地域アーキテクチャ論のアウトラインである。

地域的アーキテクチャ (regional architecture)

ところで、地域アーキテクチャ (architecture of region) と類似したものに、地域的アーキテクチャ (regional architecture) がある。後者は主に世界政治、国際秩序の地域的側面を表現する。Detlef Nolte (2014) によれば、リージョナリズムの研究領域で、地域統合、地域協力のコンセプトとは別の、地域的相互作用をあらわすオルタナティブとして地域的アーキテクチャがある。このコンセプトは最近使用されるようになったが、定義がはっきりしない。Weixing Hu Richard (2009) は、アジア太平洋地域をハイブリッドのリージョナリズムとみなし、それを「地域組織、制度、2国間・多国間協定、対話フォーラム、地域の安全・繁栄・安定を集团的に機能させる他の適切なメカニズム」としている。これにたいして、Bermann et al (2009: 19) は、グローバルガバナンスアーキテクチャとして、地域レベルでの「世界政治のある問題エリアで有効か活発に動いている民間あるいは公的な制度の包括的な体系」と定義している。前者は領域空間において強制しているルール設定についての言及が全くなされてなく、後者は地域アーキテクチャをメタレベルのガバナンスとして定義し、特定の問題課題に限定している。ベルマンによれば、リージョナリズムの異なる形態を差別化するための概念のコアに置くべきは、地域の領域空間を構成する諸規制や政治的制度であると主張される。これは政治的ガバナンス論に近い。

アジア開発銀行 (Asian Development Bank 2010) は、アジア統合の制度的アーキテクチャとして、制度化の程度が低いという理解は誤りであると主張する。ほとんどのアジアの制度では、手続き的ルールの明瞭性の不足、恒常的な書記局が引き受ける課題の少なさ、加盟国にたいする強制度合いの低さが、意思決定のコンセンサス方式、非拘束的自発的コミットメント (ソフトロー)、国家主権を尊重する価値観と裏腹の関係にあり、その結果、アジアの統合は、諸法による規制 (legalization) が制約され、そのアーキテクチャは複雑で同時に軽量 (complex and light) である。それは中央政府重視で地域諸団体・市民社会への権限移譲の低位、弾力性とインフォーマル性、コンセンサス重視とそれによる信頼・トラストの構築、漸進性が特徴とされる。ADB の見るアジアの地域的アーキテクチャは、国家を中軸に据えているが、地域の諸機能の再生産の工程の設計思想 (アーキテクチャ) と、場所 (place) とその中心としての行為体 (actor) の組織能力との「相性」(fit) のアジアの特徴を観察する方向に向かっている。

マクロリージョンに関しては、唯一 Ganzle and Wulf (2014) が EU のマクロ地域ガバナンス・アーキテクチャという概念を出しているが、しかしそのコンセプトは明示されていない。それによると、いわゆる 3つの No (制度、立法、資金) ゆえに、EUSMR のガバナンス・アーキテクチャは戦略、オペレーション、実施のレベルを緊密に結びつける EU のガバナンスの現構造のなかに組み入れられ、そのアーキテクチャは EU 制度、加盟国国家、相手国、国際機関、下位ナショナル当局、民間アクター、EU レベルの High level Group だけでなく、各国接触事

務所（Priority Area Focal points）、事務所優先領域調整者（Priority Coordinators）や各種プログラム、財政諸道具を通じて包摂されている、とされる。EUのマルチレベルガバナンスと同様なものの別表現である。ここでは、地域的アーキテクチャは様々な機能とレベルの各種アクターとその相互作用のあり方を探る方向に傾いているように思われる。地域的アーキテクチャ論は地域アーキテクチャ論の一步手前まできている。だが、機能論と行為体（アクター）論が峻別されていない。

3. 地域アーキテクチャの6つの特質

そこで次に、以上の地域的アーキテクチャ論の検討結果を地域アーキテクチャ論として組み直して行こう。それを表したのが図1である。その特質は以下6点にまとめられるであろう。

第1に、確認しておかなければならないのは設計情報を転写する媒体についてである。製造業（例、自動車）の場合は、耐久性の有形物（例、鋼板）であり、サービス業の場合は非耐久性の無形物となるが、地域アーキテクチャの場合の媒体は地域そのものあるいはインフラの集合体となり、有形と無形、耐久性と非耐久性の混合となるだろう。EUドナウ地域戦略の場合はドナウ川流域となるだろう。媒体そのものが大いに経路依存的である点が特徴である。

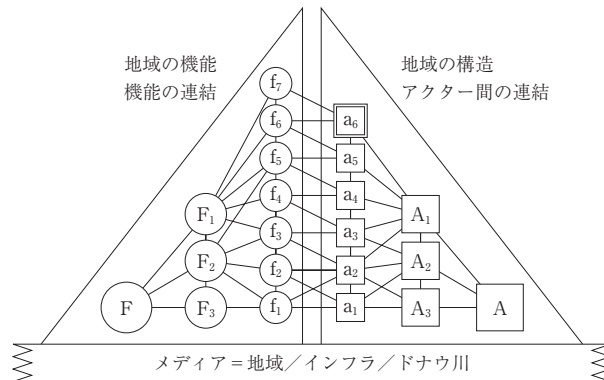
第2に、地域アーキテクチャは、魚の干物の開きのように、左側は地域の諸機能の階層的体系を表現して、大文字Fは地域の全体の総括的機能や目標を実現する機能を表現し、小文字fは地域でのマイクロ機能（安全、電力、福祉、医療、教育、ツーリズム、公的サービス等々）を表現する。アーキテクチャの右側の地域構造とは、地域を構成するアクターの階層的な体系を表現し、大文字のA、AnはEU（諸機関）、中央国家（諸機関）、小文字のaは地域のマイクロアクター（個人、消費者、自治体、NGO、NPO、地方企業など）を表現する。マルチガバナンスの主体の側面を切りだしている。図では、機能と主体を結びつける線（インターフェース）は、小文字aと小文字fのレベルしか表示していない。大文字FとAとのインターフェースは省略している。

柑本英雄（2014）が第2種行為体（商工会議所、漁協、企業）だけを機能（function）を担うものとして、第1種行為体（EU、国家、地方政府）は領域（area）を表現し、第3種行為体（環境NGO）が課題（issue）を表しているのに対して、地域アーキテクチャ論ではいずれの行為体もそれぞれの領域と課題をもつが、それとは独立したものとして機能面を押さえる。領域は諸機能の結び付きの空間的集合として押さえることができるだろう。その領域と課題は地域アーキテクチャを取り巻く環境と、各種主体によるその解釈によって変化する。

第3に、この地域アーキテクチャは大きく2つの軸で分けられる。ひとつの軸では、インテグラル型、すなわち機能（F、Fn、f）間の相互調整とアクター間の相互調整、そして各機能と各アクターの間に対応関係、相互調整が深く実行されているタイプと、モジュラー型、すなわち機能間とアクター間のそれぞれのインターフェースが単純で、同時に各機能と各アクター間の結び付きも単純なタイプとなる。ここでは機能FnとアクターAn機能、機能fnとアクターanとの関係、オペレーションや実施が重要となる。図1はモジュラー型のみを示している。

もう1つの軸は地域外にたいする関係で、オープン型とクロード型である。相互調整とイン

図1 地域アーキテクチャ



ターフェースが標準化され、外部にたいしても開かれている場合はオープン・アーキテクチャ、ひとつの地域のなかで機能とアクターが比較的閉じられている場合はクローズド・アーキテクチャとなっている。これに近い表現に closed regionalism と open regionalism がある。この裏側には単一市場の成立、グローバリゼーションがある。

第4に、製品・生産アーキテクチャと地域アーキテクチャとの最大の相違点のひとつは次の点にある。つまり、前者の場合製品構造を構成するのは人工物である部品・コンポ・モジュラー群であるのに対して、地域アーキテクチャの場合は、地域を意識的か無意識的か形成・参画・再生するアクター（諸組織、諸団体）である。EUの国境地域ではボトムの自治体、NGO、EGTCがそれに当たり、トップはEU諸機関、国家諸機関となる。製品・生産アーキテクチャの場合にはアーキテクチャの設計者は外部者となるが、地域の設計思想（地域政策、地域の理念）は地域に包摂されているアクター自身が政策決定しているかそれを創出している。この点が決定的に異なり、そのアイデンティティや理念が再帰的に重要となってくる。

第5に、ここまで地域アーキテクチャ論を明らかにしてくると、次のことが特記されなければならない。つまり、地域はもともと諸機能と諸アクターが複雑に絡み合ってそれらが複雑な関係を結んでいる。この点で豊かで高い生産性をもつ地域は、本来、インテグラル型だろう。しかし各国別の特色をもつインテグラル型の地域アーキテクチャ同士が国境を挟んで統合すると、とてつもなく複雑なインテグラル型が出現する危険性がある（複雑性とリスクの発生）。ヒト・モノ・マネー・サービスの欧州単一市場の出現は自動的にこのアーキテクチャの単純化を保障しない。反対に f1 や f2, f3 などの機能と権限を持たないか未発達の場合もある。

これに対してモジュラー型地域アーキテクチャとはどのようなものだろうか。もちろんそのような研究はないが、モジュラーリージョナリズムというコンセプトは存在する。Glan Lusa Gardini (2013) は、ラテンアメリカの地域主義を管理し解きほぐすことの困難な「サラダボール」状態をモジュラー地域主義として定義している。「サラダボール」状態をモジュラーと表現するのは以上の検討から少し違和感を覚えるだろう。しかし、モジュラーリージョナリズムを、コミットメントとコンプライアンスの程度が極めて低い、国家が地域統合プロジェクトのメンバーを選び出し、特定のエリアでのナショナルな利害と対外政策の優先権を反映させるものとして考察している。ここでは、国家に限定したアクターとそれが可能なインターフェースが特定の

エリアで低水準の機能を果たすような地域的統合がモジュラーリーとされているのだろう。地域アーキテクチャ論では、国家だけにアクターの役割を限定することはできないだろう。各アクター間のインターフェース、各機能間のインターフェース、そして各アクターと各機能の間のインターフェースが1対1に近い形でシンプルに相互作用しているタイプがモジュラー型地域アーキテクチャとなるだろう。

第6に、地域アーキテクチャ論からEUのマクロ地域戦略を観察すると図1にどのような変化をもたらすのか。それがいわゆる3つのNo（制度、立法、資金を新たに作らない）を前提にすると、地域アーキテクチャ図の右側、地域の構造、アクター間の連結の中に新しいアクターの層を出現させるものではないことが分かる。他方、マクロ地域戦略がローカル・地域/ナショナル（国民）/EUの諸政策を調整し、そのそれぞれのレベルの資金を連携（alignment）し、協力のプラットフォームを拡張して政策レベルとオペレーショナルなレベルを広範囲にEU主導で（あるいは下から積み上げて）結びつけ、調整するようになることを考えると、大文字のFとFnの間に新しい機能空間が誕生すると考えるのが自然である。これが柑本英雄（2014）のいう独自の「挟空間」に相当する。

他方、EGTCの場合は、国境間の設立された法人（どちらか一方の国内法に基づく）が独自の資産保有、独自の予算、スタッフの雇用、契約権限や訴訟権限をもち、経済社会結束を強化する目的で領域協力プログラム（越境協力、トランスナショナル協力、地域間協力）を実施する。主要な活動領域は、ポルトガルやスペインのような国では領域結束に関わる広い領域をもっているEGTCもあるが、東欧諸国の場合は観光などの地域政策に絞り、またEUのコア諸国の場合は空間計画や都市開発（文化、スポーツ、教育）などに絞られている。EGTCはMLGの実験室である（Soós, Edit 2015）。

4. 地域政策のパラダイム転換：現場から積み上げるアプローチ

以上6点にわたって地域アーキテクチャの基本的特徴を解明してきたが、次に、地域アーキテクチャと、EUマクロ地域戦略、欧州領域協力団体との関係を解明することが求められてくるだろう。その解明にはEUの地域政策のパラダイム転換の理解が重要なカギとなるだろう。2000年代の最初の10年間の後半期の同じ時期に、マクロ地域戦略、欧州領域協力団体という地域政策を実行するイノバティブな手段・用具が登場したのはそのパラダイム転換があったからである。その転換の核心についてはバルカ報告が最も的確に明らかにしている（Barca, 2009）。

それによると、EU地域政策のパラダイム転換の目的は、財政再分配政策の側面としての地域政策から離脱することである。市場と政府の失敗を克服して、地域のもつ潜在力の恒常的な低水準利用（非効率）と恒常的な社会的排除を減少させ、地域政策の実施過程が進行している場所＝現場（place）で地域政策の介入が行われることを求めている。placeは機能的地域（functional regions）とも呼ばれる。その方法と手段は、特殊な領域のコンテキストに合わせ、ローカルな情報と選好を顕在化させ集約し、地域の公共財・サービスを統合して東にしながらか供給することである。このような、トップダウンで画一的に課される地域政策、諸プログラムではなくて、ロ

一カルの諸条件（場所）に適応した地域政策を現場から積み上げるアプローチを place-based approach/strategy とバルカは称している（大文字の Region や小文字 region と混同させないために place/functional regions という用語を利用している）。これは近年に転換した OECD 地域開発政策論と同じパラダイムである（OECD 2009）。ボトムアップ型の地域アーキテクチャの形成を目指しているということになる。

5. まとめにかえて：地域アーキテクチャとマクロ地域戦略、EGTC との関係

最後にまとめに入ろう。先に触れたように、EGTC の特徴は、国境に独自の組織と予算、スタッフをかかえ欧州法人格をもつ越境団体を結成して、EU 内（外）の資金を利用して国境をまたがるプロジェクト/プログラムを実施し、公共財サービスを国境の両側に提供することにある。ただし3つのタイプがある（越境協力、トランスナショナル協力、地域間協力）。その多くは単一（monothematic）政策とプログラム、財・サービスの提供を狙ったものである。EGTC は国境線に沿ってマクロ地域戦略の活動間の調整を支援する構造を提供し、そのための知識も提供する可能性をもっている。ベーム（Kai Bohme 2013; 12）によれば、非公式な議論として、EGTC はマクロ地域戦略のプログラムを実施する単純な団体になることは魅力的であるという意見があるが、それは3つの No 原則に反する。以上のことから推測すると、国境地域にインターフェースのよりシンプルなモジュラー型の地域アーキテクチャを埋め込もうとしているようにも見える。EGTC とマクロ地域戦略を地域アーキテクチャの視点から考察すると、欧州の地域政策は、ボトムにミクロなモジュラー型、マクロにインテグラル型の地域アーキテクチャを配置して、欧州統合に相応しい地域を創出しようとしているのではないか。ミクロ・ローカルな越境協力の中から分離・成長してきた EU のマクロ地域戦略は、出身母体を包摂しながら進化している。

注

- * 本稿は進化経済学会第19回全国大会企画セッション「欧州統合のなかでの重層的な地域構造とマルチレベル・ガバナンス」での報告原稿を修正・加筆したものである。

【参考引用文献】

- 飯嶋曜子（2012）「EU の地域政策とニューリージョン—ルーマニア・ブルガリア国境地域の変容を事例として—」小林浩二／大関康宏編著（2012）『拡大 EU とニューリージョン』原書房, pp. 15-29.
- 遠藤聡（2012）「地域経済研究における制度論的アプローチの諸潮流と展開」『龍谷政策学論集』 pp. 47-64.
- 小川有美（2001）「EU ヨーロッパの拡大——国家形成か開発協力か——」秋元英一編『グローバリゼーションと国民国家の選択』東京大学出版会第7章
- 柑本英雄（2008）「リージョンへの政治地理学的再接近：スケール概念による空間の混沌整理の試み」『北東アジア地域研究』14号 2008年10月 pp. 1-20.
- （2010）『EU 地域空間再編成とサブリージョン——越境する非国家領域行為体とクロススケールガバナンスの視座からの分析——』（早稲田大学審査学位論文 2010年12月）
- （2011a）「新しい「地域」の胎動：マクロ・リージョン『バルト海戦略』から見た東アジアの地域協

- 力推進可能性への視角」『都市計画』60巻2号 2011年04月 pp.7-14.
- (2011b) 「スケール間の政治と“マクロ・リージョン”：『EUバルト海戦略』成立過程の研究」『北東アジア地域研究』17号 2011年10月 pp.31-47.
- (2014) 『EUのマクロリージョン』勁草書房
- 清水耕一 (2013) 「EU 地域政策の進化と越境地域間協力 (CBC) の現状」2013年進化経済学会報告
- 田中宏 (2009) 「欧州統合とユーロリージョン—越境協力の第三段階—」篠田武司・西口清勝・松下列編『グローバル化とリージョナリズム』お茶の水書房 pp.227-248.
- (2013) 「EUのマクロ・リージョン戦略：ドナウ川流域のケース」『立命館国際地域研究』38, 1-24, 2013-10
- 辻悟一 (2003) 『EUの地域政策』世界思想社
- 西口清勝・西澤信善 (2014) 『メコン地域開発とASEAN 共同体』晃洋書房
- 藤本隆宏 (2002) 「製品アーキテクチャの概念・測定・戦略に関するノート」独立行政法人経済産業研究所 REITI Discussion Paper Series 02-J-008
- (2003) 『能力構築競争』中公新書
- (2007) 『ものづくり経営学』中公新書
- 豊嘉哲 (2007) 「EUの地域政策について」『山口経済学雑誌』第56巻第6号, pp.209-232
- 蓮見雄 (編) (2009) 『拡大するEUとバルト経済圏の始動』昭和堂
- 若森章孝・八木紀一郎・清水耕一・長尾伸一 (編著) (2007) 『EU 経済統合の地域的次元：クロスボーダー・コーペレーションの最前線』ミネルヴァ書房
- Ahmiya, Mourad (ed.) (2008) *The Collected Documents of The Group of 77: South-south Cooperation (Group of 77 at the United Nations)*, Oxford University Press
- Asian Development Bank (2010) *Institutions for Regional Integration—Toward an Asian Community* — Bartlett, Will and Monastiriotis, Vassilis (eds.) South East Europe after the Economic Crisis: a *New Dawn or back to Business as Usual?* LSE and LSEE
- Barca, Fabrizio (2009) An Agenda for a Reformed Cohesion Policy, http://www.europari.europa.eu/meetdocs/2009_2014/regi/dv/barca_report_/barca_report_en.pdf/2015.02.14/
- Braun-Zoltan, Gabor and Kovacs, Laszlo (2011), Macro-Regional Strategies, Experiment for the Renewal of Economic Policy of the European Union, *Public Finance Quarterly*, Vol. LVI, 1 issue
- CRPM-CPMR (2012) *Technical Paper from the CPMR General Secretariat, Guidelines for the Drafting and Implementation of Macro-Regional Strategies (MRS)*, Reference CRPMNTP120040 AO-September 2012
- Dühr, Stefanie (2011) Baltic Sea, Danube and Macro-Regional Strategies: A Model for Transnational Cooperation in the EU? *Notre Europe* 86
- EUEC (2011) *Panorama Inforegio* 37.
- European Commission (2013) Report from the Commission to the European Parliament, the Council, the European Economic and Social Committee and the Committee of the Regions concerning the European Union Strategy for the Danube Region, Brussels, 8. 4. 2013, Com (2013) 181 final.
- Fleisher, Tamas (2013) EU Strategy for the Danube Region: Expectation and Realities, (Budapest, February 21st 2013)
- Farkas, Beata (2011) The Central and Eastern European Model of Capitalism *Post-Communist Economies, Vol. 23, No. 1, 2011*
- (2012) The Impact of the Global Economic Crisis in the Old and New Cohesion Member States of the European Union, April 29, 2012, *Public Finance Quarterly/Pénzügyi Szemle Vol. LVII, Issue 1, pp. 53-70*
- Gal, Zoltan (2012) *Danube Region, Transnational Regional Report* (VI, 16 February 2012), Territorial

- Scenarios and Visions for Europe (ET2050), Pecs
- Ganzle, Stefan and Wulf, Johann-Jakob (2014) The Emerging Core of the EU's Macro-regional Governance Architecture; ISL Working Paper 2014: 1, Department of Political Science and Management, University of Agder, *Gardini*, Gian Luca (2013) The added value of the Pacific Alliance and 'modular regionalism' in Latin America, <http://blogs.lse.ac.uk/ideas/2013/06/the-added-value-of-the-pacific-alliance-and-modular-regionalism-in-latin-america/2015.02.02>
- Gogacz, Monika (2009) Macro-regional strategies in the European Union (September 2009) http://ec.europa.eu/regional_policy/cooperate/baltic/pdf/macrorregional_strategies_2009.pdf
- Groenendijk, Nico (2013) Macro-Regions: Regional Integration within and beyond the EU, Paper presented at the 21st NISPAcee conference, Belgrade, 16-18 May 2013.
- Hardi, Tamás (2009) *Duna-stratégia és területi fejlődés*, Budapest, Akadémia Kiadó
- Havlik, Peter (2013) Danube Strategy: How to Bridge the Upstream-Downstream Divide(s) ? (at WIIW, Vienna, February 18th 2013)
- Hogenforster, Max (ed.) (2012) *Strategy programme for Innovation in Regional Policies in the Baltic Sea Region*, Books on Demand
- Jacic, Margarita, Fabio Croccolo, Ulrich Graute (2008) INTERREG III B CADSES, Results, Issue 2, Advancing Neighborhood Co-operation.
- Jaansoo, Annika and Groenendijk, Nico (2014) Cross-border delivery of public services: How useful are EGTCs ? 54th ERSAC Congress, St. Petersburg, 26-29 August, 2014/www.eukn.org/dsresource?objectid=340388
- Matarrelli, Federico (2012) The Macro-regional Concept as a New Model of Differentiated Integration, (<http://lup.lub.lu.se/luur/2013.08.24>)
- Nolte, Detlef (2014) Latin America's New Regional Architecture: A Cooperative or Segmented Regional Governance Complex ? EUI Working Paper RSCAS 2014/89
- Novello, Mauro (2010) What is the EU Strategy for the Danube Region ? http://www.interact-eu.net/downloads/1915/Newsletter_INTERACT_Territorial_Cooperation_Onboard_with_the_EUSDR__Issue_2010-04.pdf/2013.08.24/
- Panteia and Partners (2010) Interreg III Community Initiative (2000-2006) (No. 2008. CE. 16. O. AT. 016) Final Report
- Samecki, Pawel (2009a) From the Baltic Sea to the Danube Basin—a Macro-regional Strategy for the EU, Speech delivered at ministerial conference, Stockholm, September 16, 2009 http://ec.europa.eu/regional_policy/cooperation/baltic/documents_en.htm/2012.12.10/
- (2009b) Macro-regional strategies in the European Union, (a discussion presented by Commissioner Pawel Samecki in Stockholm on 18 September 2009)
- Soós, Edit (2015) Contribution of EGTCs to multilevel governance, http://www.ias-iisa.org/egpa/wp-content/uploads/020_SO%C3%93S-Contribution_of_EGTCs_to_Multilevel_Governance-213PSGXIV.pdf/20150108/
- Stocchiero, Andrea (2010) Macro-Regions of Europe: Old Wine in a New Bottle ? CeSPI Working Papers, 65/2010 (ENG)
- Stockhammer Katrin (2013) The EU Strategy for the Danube Region, INTERACT Point Vienna, meeting with Ritsumeikan University (18.02.2013)
- Schymik, Carsten (2011) Blueprint for a Macro-Region, EU strategies for the Baltic Sea and Danube Regions, SWP research Paper
- Tatur, Melanie (ed.) (2004) *The Making of Regions in the Post-Socialist Europe—the Impact of Culture, Economic Structure and Institute*, Volume I. VS Verlag für Sozialwissenschaften

- VATI (2009) *Falu Varos Regio*, Kulonszam, 2009/1
- Vedres, Balazs and Bruszt, Laszlo (2010) Local development agency from without, Aiding transnationalizing local alliances between state, civil society and business /<http://www.eui.eu/Documents/DepartmentsCentres/SPS/Profiles/Bruszt/BrusztFosteringDevelopmentalAgency.pdf>/2013. 02. 18/
- Wulf, Johann-Jakob (2012) One year Danube Strategy-a first prime test of territorial cohesion in the EU? University Association for Contemporary European Studies annual Conference, 2-5 September 2012, Passau, Germany
- Zielonka, Jan (2006) *Europe as Empire, The Nature of the Enlarged European Union*, Oxford University Press